

早期胃癌における腹部 CT 検査および腹部超音波検査の意義

三上 公治¹⁾ 佐藤 啓介¹⁾ 石井 文規¹⁾
富安 孝成¹⁾ 石橋由紀子¹⁾ 永川 祐二¹⁾
東大 二郎¹⁾ 二見喜太郎¹⁾ 戸原 恵二²⁾
植木 敏晴²⁾ 松井 敏幸²⁾ 中島 力哉³⁾
前川 隆文¹⁾

1) 福岡大学筑紫病院外科

2) 福岡大学筑紫病院消化器科

3) 福岡大学筑紫病院放射線科

要約：目的：胃癌の治療方針決定には、術前腫瘍進展評価と併存疾患の把握が大切である。術前検査における multidetector-row 腹部 CT 検査（MDCT）と腹部超音波検査（US）の意義について検討した。対象と方法：2006年1月から2008年12月までの3年間に上部消化管造影検査および内視鏡検査で早期胃癌と診断し手術を行った症例は70例で、術前に MDCT および US の両検査を施行した症例は63例であった。各検査のリンパ節転移診断率と他臓器の構造異常の指摘を比較した。結果：MDCT のリンパ節転移診断の感度、特異度および正診率はそれぞれ33.3%，98.1%および88.9%であった。US でリンパ節転移を指摘できた症例はなかった。MDCT あるいは US で指摘された胃とリンパ節を除く臓器構造異常は92箇所（52例）で、このうち44箇所は両検査で指摘できた。MDCT のみで検出された併存疾患は鼠径ヘルニアと腹壁癒痕ヘルニアであった。US のみで検出された併存疾患は、胆嚢ポリープと慢性肝炎であった。MDCT か US のいずれかで指摘された異常により、5例（7.9%）でリンパ節郭清度の変更と癒痕ヘルニア修復治療を行った。結論：早期胃癌に対する術前 MDCT と US は、併存疾患の存在診断に有用であった。全症例に両検査を行う必要性は低く、患者の状態と予定する治療に応じ検査を行うべきである。

索引用語：早期胃癌， multidetector-row CT 検査，腹部超音波検査，リンパ節転移